

能代高

32

バレーの根性

武田監督鬼よりこわい。

バレーボールといえば、“オニの大松”。が、能高バレー部の武田重蔵(16期、現能代商業)は、鬼よりもっとこわい監督といわれた。目がクリツとして笑顔絶やさない。その顔からは想像できぬコートでの厳しさ。あの試練に、選手全員が耐えた。だから、全国優勝の輝く栄冠を手にすることができた。

「キミ方、がりつと練習する気だば、きつと、日本一にしてやるぞ」

武田監督はいった。鍋谷、小野らの体操部が日本一になったのだから、わがバレー部も全国

制覇できないわけがないというのだ。

「必ずやってみせるがら……」

選手の前で、はつきり宣言した。秘かな自信もあった。

“だまってついて来い”――

ぐいぐい選手を引っぱる武田監督。選手もよくついていった。

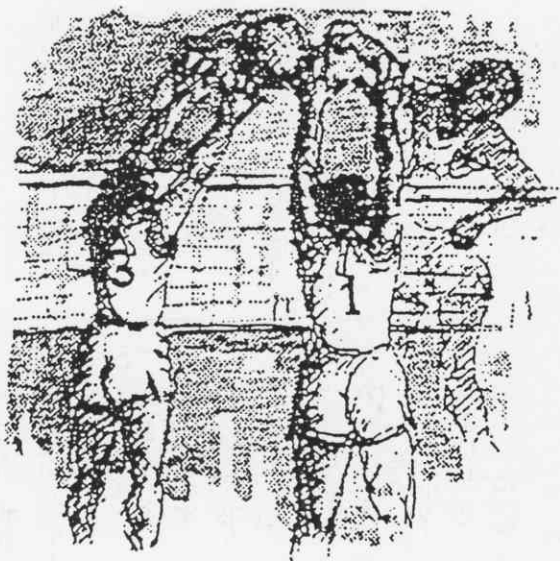
武田がなつかしの母校で監督に就任したのは二十六年四月。

この時、ひよつとしたら、能代北高(女学校)の監督になっていたかも知れない。

というのは、早大を出て帰郷した。そこへ北高と南高(能高は当時能代南高といった)の南北両校から誘われた。

早大バレー部で活躍した名選手。日立、新日鉄からもスカウトの話があつたくらいだから、ひっぱりだこも当然だ。

北高バレー部は、小山幹朗先生(1期、南双葉幼稚園長)が



さし絵は戸松恭一(新11期・能代高教諭)

監督。いいチームだった。

小山先生の熱心な誘いで、じゃあ、やってみようか、という気になりかけた。はつらつとした女高生への指導も悪くない。

一方の能高は恩師宮腰斌一先生（前能代市教育長）がバレー部の監督をしており、伝統に支えられ、つぶざろいの手がいた。

「母校に来てけねもんだすかな」
二つに一つ——武田は迷ったが、母校を選んだ。

能高（能中）バレー部の歴史は古い。

栄光の記録は、戦前から——

谷内勝美（1期、元能代一中校長、県バレーボール協会副会長）、小山幹朗らが、在学中に部を結成、後輩へ道を開いた。

平川正司（4期、平川木材）
吉武栄司（6期、能代北高）佐藤実（同、同）山本厚（12期、

黒沢商事）泉（能上）勇（同、東北電力）石井周平（同、石井樽丸社長）など。

武田が入部する以前から、力のある選手が続出。県大会優勝など、文句なしの強さを誇っていた。

「やってみねが。大いにやっぺしや」

東能代から通学していた先輩の渥美義雄（13期、国鉄）。武田にバレーの良さを教えたのが渥美だった。

昭和二十一年。早大に入ってからまち頭角を現した武田。

しかし、能中時代は、ついに正選手にならずじまい。上級生の肩もみ、水くみ、ボール拾い……全くの下積みだった。四年生になれば正選手と思っていた矢先、球技は戦争のため全面中止となった。

さて、能高の監督として武田

監督は常にいった。

「ボールさ、心こもっていねばやさね……」

ねらった位置にボールが飛んでいく……それだけでいいとは決していわない。

“心”が問題だった。

そして、最も大事にしたのがチームワーク。

チームワークとは？結局、チームメイトに対する思いやり——武田の信条だ。“人への思いやり”——それが試合での勝ちにつながる。

昭和三十一年——能高バレー部にとって、永遠に忘れられない記念の年——全日本バレーボール高校選手権大会の優勝。

「あつさり勝てるもんだ！」

強い時とは、そんなものか。武田監督は、五年間の張りつめたものがとけた気がした。

金字塔をたてたのは鈴木捷徐

（東洋レーヨン）菅原貞敬（同）平川政弘（同）檜森清隆（檜森工務店）寺田良照（スーパーテラタ）越後（大山）鉄雄（能代地区製材協会）——いずれも新9期。

「バレーを通して、人間の生き方を教えてくれた」「どんなことがあっても、オレは絶対勝てる」この自信、この信念——武田監督は、選手たちの胸に、なににもかえがたい“あるモノ”を残した。
（敬称略）

